

海外から見た中医学の動きと日本への提言

戴 昭宇^{*1}

^{*1}香港浸会大学中医薬学院、^{*1}NPO法人日中健康科学会

今年、北京、上海、広州、成都といった「4大中医学院」にとっては、大学教育の発足以来の60周年を迎えている。盛大な学園祭が各地で開催され、各大学の海外校友会でも記念イベントを相次いでに企画した。全米中国中医薬大学校友連合会ではネットを生かし、在米の各中医大の校友達が母校と連携し合い、それぞれの大学の歴史や伝統、各地の顔とした老中医達の優れた学術業績を回想しながらアピールし、数ヵ月をかけて交流で賑わった。香港でも今日、「4大中医学院」の香港・マカオ校友会の共催で中国中医大学教育60周年記念シンポジウムを行っている。

中国政府は近年、中医学を中国の文化、医療、産業ならびに生態と科学技術の諸分野においては、独特な優位性を持ち、将来性も大きい良い資源として強調している。「一带一路」（21世紀のシルクロード経済ベルトと海のシルクロードの構築）と「健康中国」「大健康戦略」などの国の発展針路には、いずれも中医学を重視し強くバックアップしようとの施策が含まれている。去年12月、《中華人民共和国中医薬法》（草案）が公表され、法整備を通じて国から中医学の伝承と発展を保障し促そうとの政府の姿勢を明示。今年2月、国務院から《中医薬の発展に関する戦略の概要》（2016-2030年）を頒布した。8月に入り、《国の科学技術に関する第十三箇5ヵ年計画》と合わせた《中医薬の発展に関する「第十三箇5ヵ年」計画》も登場。また、中国からの国際的な提携と合作の展開を主眼とする《中医薬における「一带一路」発展計画》でも、今年年内で公表される見込みである。

こういう情勢の中、屠呦呦教授の去年度、青蒿素（アルテミシニン、チンハオス）といった抗マラリアの新薬開発によるノーベル医学賞の受賞から激励を受けたことも加え、中医関係者達が意気高揚となり、現代中医学の教育、臨床と研究の歩みを振り返えして反省し、国内外における中医学の現状と課題を議論し合い、これからの中医学の国際的な発展を如何に推進すべきか、と熱気に溢れた討論を繰り返している。

去年から、世界各国の中医薬関係者を結集し、多数のサークルと団体を連携し合わせ、学術交流の輪を一気に広げてネット上から国際的なサークルメンバー達が随時に教育講座や学術討論会などの開催ができるようになり、互いに切磋琢磨し合い質疑応答も便利で行われるようになり、その情報の伝達と交流を自由で実現させたのは、WeChat（微信）という携帯電話のAPPに頼ったところが多いのである。

日進月歩の国際的情報化社会に身を置き、筆者は一応中国大陸および日本と少し違う海外の視角から、中医学に関する内外の最新な動きを考察してみる一方、日本へこれからの中医学の発展に関するご提言もさせていただきます。